

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 8 月 31 日現在

機関番号：32682

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12527

研究課題名(和文)中国南北朝隋唐時代における歴史の忘却と創造

研究課題名(英文)Oblivion and Creation of History in the Northern and Southern Dynastie Sui Tang Dynasties of China

研究代表者

会田 大輔(AIDA, DAISUKE)

明治大学・研究・知財戦略機構(駿河台)・研究推進員

研究者番号：70551844

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文):南北朝隋唐時代は遊牧民と漢人が対立から融合に至った時代である。その過程で多くの歴史書が編纂されてきた。このうち王朝主導で編纂された正史は、王朝の正統化・理想化や同時代批判などの理由で歴史の一部の忘却や創造がなされることがある。本研究では、そのうち北周の六官制・梁の武帝像などの忘却と創造過程を解明した。また研究成果を反映した概説書『南北朝時代 五胡十六国から隋の統一まで』(中公新書)も刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、従来指摘されてこなかった北周の官制・梁の武帝の歴史像・北魏の君主号などについて、正史の作りに基づく歴史の忘却と創造過程を解明した。このことは従来の南北朝時代像の一部を塗り替えることにつながる。また、研究を社会還元するために、研究成果を反映した概説書『南北朝時代 五胡十六国から隋の統一まで』を刊行した。

研究成果の概要(英文):The period of the Northern and Southern Dynasties was one in which nomads and Han Chinese went from conflict to fusion. In the process, many history books have been compiled. Orthodox histories compiled at the initiative of dynasties are sometimes forgotten or created in parts of history for reasons of dynastic legitimization or contemporaneous criticism. In this study, we elucidated the process of forgetting and creation of the six official systems of the Northern Zhou and the image of the Wu emperor of Liang, among others. I also published an overview book reflecting the results of my research, "The Northern and Southern Dynasties: From the Wu Hu 16 Kingdoms to the Unification of Sui Dynasty" (Chu Kou Shinsho).

研究分野：中国史

キーワード：正史 歴史像 北周 梁 北魏 南北朝 帝王略論

1. 研究開始当初の背景

日本の魏晋南北朝史研究は、1970年代まで貴族制・制度史研究を中心に行われてきたが、1980年代になると胡漢問題(遊牧・牧畜民と漢人の関係)にも関心が集まり、民族問題や北朝の遊牧的制度に関する研究が盛んとなった。しかし、遊牧民が樹立した北朝から、漢人を標榜する隋・唐がなぜ誕生し得たのかという問題については、未だに十分な解答をえていない。その原因の一つが南北朝・唐初に編纂された正史の問題である。例えば北齊(北朝後期の王朝)で編纂された『魏書』は、北齊の正統性を強調するために北魏の遊牧的要素を削除している。また、唐初に編纂された『周書』は、唐の建国者李淵の父祖を顕彰するなど様々な作為をほどこしている。南北朝隋唐時代に編纂された正史が唐代に普及した結果、北朝の遊牧的要素や政治状況などが意図的に忘却され、南北朝隋唐時代に創出された歴史像が定着することとなった。その結果、南北朝時代から隋唐時代への変容過程が不明瞭になってしまったのである。そこで本研究は、史料のバイアスに注意しながら南北朝時代の「実相」に迫るとともに、南北朝・唐初における南北朝歴史像の忘却・創出過程を明らかにし、南北朝時代から隋唐時代への変容過程を解明する一助とするために開始した。

2. 研究の目的

本研究は、南北朝時代像の忘却・創造過程を明らかにすることで、南北朝隋唐時代に生きた人々の歴史意識や政治的立場を解明することにある。近年、中国では、日本の史料批判研究に対する関心が高まっている。しかし、個人の歴史記憶と集合的歴史記憶の関係や、歴史記憶の忘却過程に注目している日本中近世史や西洋史(特に近現代史研究)と比べ、日本・中国ともに南北朝時代像の忘却・創出過程については研究が進んでいない。特に忘却過程に着目する研究はきわめて少ない。本研究によって、正史の南北朝歴史像にとらわれず、新たな歴史像を描く視座を得ることが可能となり、今後の南北朝史研究に大きな刺激を与えることができる。また、唐代政治史についても、多様な歴史像と唐朝の歴史政策(正史編纂)の相克という、新しい視点から分析することができ、隋唐時代の歴史像を変えることも可能となる。さらに視野を広げ、記憶の忘却と創造過程について研究を進めている西洋史や日本史との比較検討の材料を提供していくことを目指すものである。

3. 研究の方法

本研究の代表者は、これまで石刻史料を積極的に用いて、主に隋・唐の支配者層を生み出した西魏・北周の政治動向について検討してきた。その過程で、正史である『周書』に描かれた北周の皇帝・権力者像が「実態」と乖離しており、唐初の正史編纂事業の際に創出された可能性が高いことに気が付いた。

本研究では、その経験を踏まえ、文献史料・石刻史料・仏教史料といった南北朝時代に関する諸史料を網羅的に調査し、そこに描かれている歴史像の比較・分析を通じて、南北朝時代の歴史像の忘却・創出の過程の解明を試みた。

その際、南北朝の史書編纂における「事実」の意図的忘却、唐初の正史編纂事業における公定歴史像の創出、北朝系官僚による一族の歴史の創出、の三つの観点から、南北朝歴史像の忘却・創出過程の解明を試みた。

4. 研究成果

(1) 南北朝の史書編纂における「事実」の意図的忘却

北周六官制の変遷と忘却

北朝後期の王朝である北周では、儒教經典の一つである『周礼』に基づく六官制が施行されていた。これまで研究代表者は北周の六官制について研究を重ねてきた。その成果を踏まえた上で、新たに諸史料の分析を行って六官制の特徴と変遷をまとめた後、六官制のなかでも重要官職である司会・御正・侍衛などの職掌・内容が唐代に忘却された過程について検討した。

このうち六官制の特徴と変遷については、2018年5月27日に中国の復旦大学(上海)で開催された「何謂“制度”?中古制度文化新研&middledot;學術工作坊」において「北周政治史与六官制」と題して報告した。報告内容は、「北周政治史与六官制」と題して『中国中古史研究』第7巻(中西書局、2019年12月)に発表した。

また、唐代における六官制の忘却過程については、「北周官制の変遷と忘却」と題して、2018年11月10日に開催された平成30年度東方学会秋季学術大会(於京都府・芝蘭会館別館)にて報告した。北周官制は様々な形で隋唐官制に影響を与えた。そのため隋唐官制に直結する官職は、正史・『唐六典』・『通典』などに記載されている。しかし、北周の権力中枢に位置した官職であっても、隋唐官制と構造や名称が異なり、関連性が認識されなかったものは、唐代半ばには忘却されてしまった。隋唐の史書における官制叙述は、現王朝の官制に至る道筋として叙述されている。北周六官制は唐に至る道筋に位置付けにくく、体系的な叙述がなされなかった可能性がある。六官制の忘却は歴史叙述の問題と関係していると考えられる。

北魏の可汗号

遊牧民である拓跋氏（鮮卑）が建国した北魏の君主号について、北齊で編纂された『魏書』には「皇帝」「天子」しか登場せず、遊牧民の君主号である「可汗」に関する記述が一切ない。そのため、20世紀後半に北魏の皇帝の先祖を「可寒（＝可汗）」と呼んでいる石刻史料が発見されるまで、「可汗」については忘却されていた。しかし、石刻史料の発見後、研究が進み、近年では北魏の君主は皇帝と可汗の二つの顔を持ち、中華世界と遊牧世界に君臨したと考えられている。確かに北魏の皇帝が可汗を称していた可能性は高いが、石刻史料・文献史料ともに北魏の現皇帝を「可汗」と表記する史料は存在しない。そのため、北魏の皇帝が「可汗」を称したことを確定するためには傍証が必要なのである。また、なぜ北魏の可汗号が文献史料にも石刻史料にも出てこないのか考察すべきである。そこで南朝と北朝が相手国をほぼ対等とみなしつつ、相手国の君主を「皇帝」と呼ばず、「魏主」「梁主」のように「主」と呼んでいたことを踏まえ、モンゴル高原を支配して北魏のライバルとなっていた柔然の「可汗」を北魏がどう表記したのか検討した。その結果、北魏は柔然の可汗を主に「蠕蠕主」と呼び、「可汗」と表記していなかったことが判明した。さらに隋唐では突厥の君主を「可汗」と表記しており、北魏と隋唐で「可汗」に対する認識が変化していたことが明らかとなった。この研究成果については、「北魏と柔然の君主号 公文書・官撰史料・墓誌の君主表記」と題して、2022年3月20日に開催された明治大学アジア史料学研究所2021年度研究シンポジウム「公文書システムのアジア史」で報告した。

（2）唐初の正史編纂事業における公定歴史像の創出

南朝梁の武帝像

梁の初代皇帝で崇仏家として名高い武帝（蕭衍：在位502～549）の歴史像について分析した。『梁書』によれば、武帝は梁の建国後、貴族制の改革につとめた名君であったが、治世後半期には側近の朱异に政治をゆだね、梁を傾けたとされている。しかし、梁末から唐初の諸史料を分析した結果、側近（朱异）に政治を委ね、梁を傾けたという歴史像は、陳末に編纂された『梁書』で強調されるようになり、唐初に編纂された『梁書』に継承された可能性が高いことがわかった。これについては、「梁武帝像の変遷 『帝王略論』を糸口として」と題して、2018年9月15日に開催された魏晉南北朝史研究会（於東京都・東京大学）で報告した。

虞世南撰『帝王略論』

正史の歴史像の創出過程を明らかにするためには、正史を相対化する史料が欠かせない。そこで唐初に編纂された中国通史である虞世南撰『帝王略論』に着目して研究を進めた。まず、唐初に中国通史の編纂を虞世南に命じた太宗李世民が実際に『帝王略論』を読んだのか検証し、「唐の太宗は『帝王略論』を読んだのか」と題して、『明大アジア史論集』第23号（2019年3月）に発表した。唐の太宗の執筆した文章や群臣との歴史談義を分析した結果、太宗は実際に『帝王略論』を読み大きな影響を受けていたが、経験や知識が増えるにつれて徐々に『帝王略論』の影響が希薄化していったことが判明した。

また、『帝王略論』の史料批判研究を進め、その叙述に唐初の政治状況がどの程度反映しているか検討した。その成果は「『帝王略論』と唐初の政治状況」と題して、2018年12月22日に開催された「東アジアの学術と支配」共同研究会（於東京都・大正大学）で報告した。また、報告内容をまとめて、『帝王略論』と唐初の政治状況」と題して、榎本淳一・河内春人・吉永匡史編『アジア遊学242 中国学術の東アジア伝播と古代日本』（勉誠出版、2020年1月）に発表した。分析の結果、『帝王略論』が唐初の玄武門の変（李世民のクーデター）や仏教政策の影響を受けていることがわかった。

（3）北朝系官僚による一族の歴史の創出

唐朝が創出した公定歴史像は、徐々に人々の間に浸透し、南北朝時代像は画一化していった。その一方で、遊牧民に由来を持つ北朝系官僚の中には、公定歴史像を利用し、一族の歴史を創出する動きもみられる。そこで本研究では、唐初の正史編纂事業で生み出された公定歴史像が浸透していく中で、北朝系官僚（鮮卑）が一族の歴史をどのように創出していったかを分析した。彼らは北朝時代には鮮卑というエスニック・アイデンティティを保持していたが、隋唐時代に徐々にアイデンティティ変容を起こし、出自を漢人に仮託していったことが知られている。そこで侯莫陳氏（北魏から続く鮮卑系官僚）に着目し、唐朝による公定歴史像の創出後、彼らの始祖伝説・先祖伝説がどのように形作られたか検討した。その結果、唐代中期から後期にかけて侯莫陳氏の間で、正史（『晋書』・『周書』など）を利用して、晋代に活躍した劉琨（漢人）から侯莫陳氏が生まれたという先祖伝説が徐々に形作られ、鮮卑であった事実の忘却を図ったことが明らかになった。

（4）概説書の刊行

さらに上記の研究成果を反映した南北朝時代の概説書『南北朝時代 五胡十六国から隋の統一まで』（中公新書、2021年10月）を刊行した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 会田大輔	4. 巻 7
2. 論文標題 北周政治史与六官制	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国中古史研究	6. 最初と最後の頁 49-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 会田大輔	4. 巻 242
2. 論文標題 『帝王略論』と唐初の政治状況	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 65 76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 会田大輔	4. 巻 23
2. 論文標題 唐の太宗は『帝王略論』を読んだのか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『明大アジア史論集』	6. 最初と最後の頁 95 113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 会田大輔
2. 発表標題 梁武帝像の変遷 『帝王略論』を糸口として
3. 学会等名 魏晋南北朝史研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 会田大輔
2. 発表標題 北周官制の変遷と忘却
3. 学会等名 平成30年度東方学会秋季学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 会田大輔
2. 発表標題 北周政治史与六官制
3. 学会等名 何謂“制度”？中古制度文化新研學術工作坊（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 会田大輔
2. 発表標題 北魏と柔然の君主号 公文書・官撰史料・墓誌の君主表記
3. 学会等名 明治大学アジア史料学研究所2021年度研究シンポジウム「公文書システムのアジア史」（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 会田大輔	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 286
3. 書名 南北朝時代 五胡十六国から隋の統一まで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------